

氏名(国籍)	孔	月	(中国)
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博甲第4201号		
学位授与年月日	平成19年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	芥川龍之介中国題材小説研究		
主査	筑波大学教授	博士(文学)	荒木正純
副査	筑波大学教授		名波弘彰
副査	筑波大学助教授		小松建男
副査	筑波大学助教授	博士(文学)	吉原ゆかり
副査	筑波大学講師		平石典子

論文の内容の要旨

本論文の目的は、芥川龍之介の中国題材小説テキストを同時代の日本・中国の〈病〉あるいは〈狂気〉言説、それにメディアによる中国・中国人表象及び中国に在住する日本人表象とを付き合わせることで、その類似と差異を明らかにし、それを通して芥川文学を同時代の政治社会及び東アジア文化圏に〈開く〉ことを試みるものである。

本論文の構成は、以下の通り。

序章

第一章 「治療」と「病」の寓意 — 「酒虫」論

第二章 〈病〉と植民地の出会い — 「南京の基督」論

第三章 隠喩としての〈狂気〉 — 「奇怪な再会」論

第四章 偶像の時代・精神の自由 — 「將軍」における〈中間的〉まなざしの意味

第五章 「馬の脚」における帝国日本の表象 — その寓意・諷刺をめぐって

第六章 「僕」の〈支那趣味〉装置 — 「湖南の扇」論

結章

序章は書齋人の作家としてではなく、ジャーナリスト芥川の文学を対象とし、彼が中国視察の経験に基づいた作品を、主に中国関係植民地言説の中で分析することの意義と問題の所在を明らかにしている。

第一章の「酒虫」論は、素材を『聊齋志異』に求めた寓意性を追究したものである。主人公の大酒飲みという〈病〉を蛮僧が「治療」というプロットには明治後期から大正初期における〈病〉=反国家的身体と精神、「治療」=教化の構図を読みとることで、個人の内面もが国家意志に回収されていく当時の帝国日本の全体主義に向かおうとする歴史への作者の危惧が隠喩化されていると捉える。

第二章の「南京の基督」論では、当時の中国をめぐる国際情勢の文脈(コンテキスト)を渉猟し、それと

テキストの読みとを相関させるという方法を試みている。主に帝国主義・植民地主義言説から得られる半植民地中国をめぐる支配／被支配といった問題を、テキスト内部のアメリカと日本の混血児と中国人娼妓の宋金花との間の〈病〉の関係に照応させ、「日本人旅行家」の視点がある関係をどのようにとらえているのかを考察している。

第三章の「奇怪な再会」論では、主人公の中国人女性の狂気に着目して、同時代の狂気言説を通して主人公の狂気の両義性をとらえることを試みている。そしてそれが植民地言説としてのメタファーの意味をもっていることを明らかにし、帝国日本による〈支那〉への領土的欲望が、中国人女性を犯すことの喩としてみつけられていることを考察している。

第四章の「将軍」論では、日露戦争を題材に、複数の人間のまなざしを通して、乃木希典をモデル化したと思われるN将軍を他者化するという芥川の方法を分析する。このような帝国日本にとって絶対的価値として崇められていた英雄を他者化するという方法を通して絶対の無化をはかるというモチーフは、英雄ブームが再興した1920年代の時代動向とも関わることをふまえ、作者芥川は帝国主義戦争の狂気性への批判だけでなく、絶対価値への反発をも捉えている。

第五章の「馬の脚」論は、その奇怪なプロットである主人公が仮死状態にある時、冥界で「馬の脚」を接合されたという寓意の解釈を試みている。その方法はまず「北京」の「順天時報」「同仁病院」「三菱」「本願寺」など、この作品の舞台空間を構成するコードの解釈を、当時の日本と中国の国際関係の文脈の中でおこない、帝国日本の浸透する北京の危機的様相が集約されていることを明らかにする。このコード解釈のうえで、主人公の内部に抑圧されていた帝国主義国家の欲望を「馬の脚」と主人公の分裂（狂気）の両義性から表象したものと解釈している。

第六章の「湖南の扇」論は、「僕」という日本人旅行者を登場させ、日本人からすれば〈狂気〉とも捉えられる中国湖南の女性の情熱的行動を見つめさせるという構造を通して、中国人女性の〈狂气的〉な行為に、「僕」は漢籍で読んだ「支那人」のグロテスクな面しかみようとしないが、テキストの文脈は、その行為に「僕」には理解を越えた、愛人（革命家）への献身的な愛と協力を逆説的に浮かび上がらせている。その姿勢こそ〈支那趣味〉の日本知識人にありがちな視線であった。そこから作者芥川は「僕」の〈支那趣味〉の視線を逆手にとって巧妙にその眼の偏向性と知識のアナクロニズムを批判していると捉えている。

結章は、以上各章のテキスト論に一貫した方法論で分析した結果をまとめ、芥川文学は帝国日本の植民地主義を批判しながら、中国人には蔑視の眼差しを向けざるをえなかったという両義的な態度をとっていたと結論づけ、その問題性が当時の知識人の国際感覚につらなることを批判的に指摘している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は多様化する芥川文学研究でいえば、正統的ともいべきテキスト論である。しかし方法はテキスト内部の文脈を作家芥川の伝記的事実と結びつけてその意味を捉えるという作家論に限りなく近い従来の芥川研究を乗り越えて、テキストの外部の日本と中国の間の帝国主義・植民地主義言説を渉猟し、そこから得られた同時代のコンテキストと小説テキストの文脈とを照応させ、その類似と差異を読みとるものである。このような方法は近年の研究動向の潮流になりつつあるが、本論文はその鋭いテキスト分析の上に立って、従来の研究では注目されてこなかったメディアにおける帝国主義・植民地主義言説を時代のコンテキストとして豊富に取り込み、新たな芥川文学の〈読み〉を切り拓いていると評価することができる。

このような方法によるテキストの〈読み〉の独自性、時代の政治的社会的コンテキストとの照応的確さは、特に「酒虫」「奇怪な再会」「馬の脚」「湖南の扇」の各論において発揮されていると認められ、その論考は学界に新たな知見をもたらしたと評価されている。それに対して、「南京の基督」「将軍」の二論は、そ

それぞれのテキストを強引に中国関係言説に結びつけようとしていて、過剰な〈読み〉といわざるをえない。

ただこの過剰な〈読み〉は決して欠陥とはいえない。芥川文学は文脈の多義性をその個性としている以上、著者の読みは東アジア文化圏における読みとも認められる。日本人研究者からすると読み込み過ぎと思われるが、著者が目論んだのは東アジア文化圏において芥川文学の〈読み〉の可能性への探求といってよいかも知れない。中国関連言説との照応にこだわることで、本論文が芥川文学に新たな解釈を加えたと評価できることからしても、学位論文として十分な水準に達していると判断される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。